

国際協力

JICA 駒ヶ根

「フェアトレード」「Table For Two」 清泉女学院の実践報告

長野市の清泉女学院短期大学、武田准教授は昨年「国際協力」の授業にJICA駒ヶ根と連携した訓練所での合宿プログラムを実施しています。今年6月に合宿を体験した学生たちは、この経験を活かしてアクションプランを着実に実践しています。

清泉女学院短期大学 准教授 ^{ただ}武田 ^こるい子 さん

清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科では、国際ボランティア講座として3つの講義科目と海外ボランティア実習を開講しています。「国際協力」では、JICA駒ヶ根にご協力いただいて開発教育プログラムを学んでいます。

2日間の集中講義で合宿形式をとり、2回目の今年も2年生13名が意欲的に参加し、ワークショップや講義を通じ、世界情勢について視野を広げることができました。プログラムの内容は、「貿易ゲーム」



▲2日間のプログラム最終日

「JICA事業概要」「青年海外協力隊事業」「バーंगा」「体験談」「清泉祭での国際協力展示・企画づくり」でした。学生たちは初めての「貿易ゲーム」に高まる感情を抑えきれない様子で、「貧しい国の人々の気持ちが理解できた」「こんなふうには社会は格差を作り出すんだね」など感想を述べ、途上国・先進国の格差がなぜ生まれるのか熱心に議論していました。

その気づきを他者に伝えることが重要だと考え、清泉祭(10/18-19)で国際協力の展示をすることにしました。「先進国の私たちにできることは何だろうか？」をテーマに、「フェアトレード」とは何か、しくみを説明するポスター展示とフェアトレードバナナを使ったチョコバナナの販売を行いました。

「国際協力」なんて私にはできないと思われがちですが、身近な国際協力の方法を知らせ、学内でもできることから実践していくことが重要です。うれしいことに、「Table For Two」(学食メニューの一つ、一食につき20円ずつを途上国の学校給食に寄付するしくみ)という取組みも秋から始まりました。

特集

開発教育支援

TOPICS

清泉女学院の実践報告	P1
未来を担う若者達へ	P2
開発教育をきっかけに	P2
海外貧困支援学習を支えてくれたもの	P3
開発教育に関わるひとつの試み	P3
エッセイコンテスト 受賞者インタビュー	P4
平成20年度教師海外研修	P4
お国自慢レシピ	P5
訓練所こぼれ話	P5
長野県出身ボランティア 奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
訓練所の日	P7
お知らせ	P8

駒ヶ根訓練所(JICA駒ヶ根)の 地域連携事業

JICAボランティア派遣前訓練の他に、県や自治体・学校等と連携した開発教育・国際理解教育の実践支援についても、随時ご相談を受付けております。



▲清泉祭の展示

未来を担う若者達へ

毎年、訓練所見学に訪れる風越高校の皆さん。担当の桐生先生は、「生徒たちが訓練所との関わりを通じて視野を広げ、意欲的に国際理解・協力に向かって取り組むようになってきている」と話されます。

長野県飯田風越高校 教諭 ^{きりゅう けんぞう} 桐生 賢蔵 さん

毎年1学期に飯田風越高校国際教養科の1年生が駒ヶ根青年海外協力隊訓練所を訪問し、国際協力の研修をさせていただいている。以下に受け持ちの生徒達（現2年生）と訓練所とのつながりの一端をご紹介します。

昨年5月にJICA駒ヶ根スタッフの講話を聞き、生徒達は7月の文化祭で同スタッフが主宰する「ペルー少年野球チーム支援活動」に取り組み、その1週間後に訓練所見学、3月に国際交流推進員と元ラオス派遣隊員の小畑友美さんのお力添えでラオスの高校生15名との交流ができた。この交流が縁で5月の同所での「地球のステージ」のご案内をいただき、生徒達2名が鑑賞して感動し、是非同ステージを飯田に招き仲間達や地域の人達にも紹介



▲2008.7.20 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所見学

たいと感じた。日程、費用、実行委員会結成などの問題はあったが、飯田国際協力推進協会のご支援をいただけ、地元の3高校の有志の生徒達と連携して実行委員会ができ、10月25日に同ステージが飯田で開催できた。訓練所もご後援下さり、多くのお客様から「とてもよい公演で、感動した」とのご感想をいただけ、企画は成功した。同ステージ事務局のご支援、地元の方々のお力添え、異なる高校の仲間達との連携など、多くの想いが結実した結果だった。

生徒達のこのエネルギーは、少なからずこれまでお会いした同所の皆様との出会いからいただいている。やがて生徒達もその心を受け継ぎ、末永く平和な未来の世界を担う若者へと成長してくれることだろう。

開発教育をきっかけに

スリランカ隊員の漆原伸也さんと交流を続け、また開発教育支援の出前講座も受けてきた松川高校の皆さん。「開発教育は人が生きる力を目覚めさせる力がある」と語る竹松先生のコメントとともに高校生が何を感じているのかをお伝えします。

長野県松川高校 教諭 ^{たけまつ} 竹松 ゆかり さん

生徒には広く世界の様々な問題に目を向け、感じ考える力を養って欲しいと考えている。自分たちが住む国、地域のあり方や、自分自身の生き方に立ち返って考え、真に社会で生きる意義を見いだして欲しい、とも思う。元本校職員で現在スリランカで協力隊員として働く漆原先生とのメール交換、JICAの派遣授業から多くを学ぶ事ができた。

「世界がもし100人の村だったら」のワークショップから生徒はとても深い衝撃と問題意識を与えていただいた。文化祭ではこの本の一言一言を皆で毛筆で書き、展示した。これを見て、多くの生徒達が涙した。

修学旅行では、自分たちのエコメッセージ、ピースメッセージを携え京都の町へ繰り出し、外国人観光客からメッセージを集めた。自分たちのメッセージに賛同してくれた観光客に呼びかけ「100人の写真」を撮った。国籍や文化は違うが、「願いは一つ」を実感した。

今、皆が自分の進路決定を目指している。ほとんどの生徒達が自分の世界が確実に広がったという実感を持っている。夕暮れの京都の町で、見知らぬ人々に自分たちのメッセージを呼びかけ、ほんの数分間で100人の写真を撮った彼らが、今見つめている世界は広く深い事を確信している。

以下に、生徒のコメントを紹介する。



▲100人の写真

私は青年海外協力隊員として実際に国際支援を経験された方の講義を受けました。皆さん、その国や人々、文化を語る際、大変愛情をこめた暖かい言葉で話してくださいました。そして私はそのことに率直に感動しました。このことがきっかけで、私は海外の様々な問題に関心を持つようになり、将来は発展途上国が抱える問題に取り組む仕事に就きたいと考えるようになりました。そして今は、将来の目標を実現できるように大学への進学に向けて奮闘しています。

松川高校3年 亀本 寛貴

海外貧困支援学習活動を 支えてくれたもの

今年10月、中部各県の教育現場で優れた業績をあげた教育者を表彰する「中日新聞教育賞」を受賞された原先生。学校でどのように国際理解教育を行っているのか、その一例をお話していただきました。



▲授賞式の様子 右から2番目が原先生

駒ヶ根市赤穂東小学校 教諭 ^{はら}原 ^{いくお}郁雄 さん

今回、計らずも「中日新聞教育賞」を受賞させていただきましたが、これはJICAを初めとして、様々な関係機関に支えられて学習活動を展開してこれたお陰です。

私は前任校から6年間ほど「海外貧困問題」を学級の総合的な学習の時間で取り組んできました。貧困問題の現実に触れ、「何か支援したい」という思いを持った子ども達とアルミ缶集めをして海外に衣類を送ったり、「ストリート・チルドレンの気持ちを知るために実際に泊まってみたい」という思いの下、屋外でダンボールと毛布で体験宿泊をしたりもしました。

そんな中、支援に対する現地の反応を実際に感じられる海外体験方法を探していた時、JICA中部が企画している研修プログラムを知り、アフリカ・マラウイ共和国に行かせていただきました。「相手の顔が見えない」という課題の打開策として担任の私が「支援物資」を届け、その反応を持ち帰ることにしました。もちろん「支援物資」は「依存心の元になるから」と断られた訪問先もありました。この現実に向き合って本当の学習ができました。子ども達が「単なる物資支援より本当に相手のためになる支援は何だろう」と考えることが出来たのは収穫でした。また、マラウイで出会った青年海外協力隊員の現地に入り込み、難しい状況の中、本当にひたむきに果敢に取り組む姿に、私は素直に頭が下がり、彼らの存在は本当に世界に誇れる数少ないものの一つだと思いました。

開発教育に関わる ひとつの試み

中部教職員会で講座別学習会を担当されている木下先生に、その取り組みや今後の期待について紹介していただきました。

伊那市長谷中学校 教諭 ^{きのした}木下 ^{まさひこ}正彦 さん

「開発教育」という言葉を小中学校の教職員の中で何人が知っているだろうか。「国際理解教育」ですら、英語の学習や外国の方との交流、あるいは外国調べ程度しか捉えていないのではないかと。現状の反省と「国際化」の真っ只中に生き、次代を担う子ども達にグローバルな社会力を育てたいという期待を踏まえて、中部教職員会（伊那市・南箕輪村の小中学校と伊那養護学校の教職員約550名で組織）では毎年20講座程度を企画している。外部専門家を招いた学習会「講座別学習会～その道のプロに学ぼう～」の1つとして「異文化理解ゲームを通して、世界の現状を知ろう」という講座をここ数年開設し、参会者がワークショップを進めながら世界の現状について理解を深めたり広めたりしている。

「学校単位で出張講座など提供していただきたいと強く願う講座内容でした。」

「自分自身の世界観が広がる内容でした。」

「ワークショップのおかげで、世界に対する自分の認識がいかに弱かったか痛感しました。この感動と感激、驚嘆を何とか子どもたちにも知らせてみたいと思いました。」

上記は昨年度の参会者の事後アンケートの一部だ。教職員自らがこのように直に体験することで子ども達にとっても新鮮な感動ある授業が仕組めることであろう。

現場の教職員が新しい分野・領域に接し、ゲーム感覚で学びを体験し、それを学校現場に持ち帰り、子ども達に手を変え品を変えたりして「世界の今」を分かり易く体感させていくことは、開発教育の普及の一助になるかと考える。今後もこの講座の充実をめざして関係諸機関とも連携していきたいものだ。



▲伊那市長谷中学校1年生 JICA 駒ヶ根「職場見学学習」

一番身近な開発教育 ～エッセイコンテスト～

開発途上国の現状と国際協力の必要性について理解を深めることが目的の1つであるエッセイコンテスト。上伊那農業高校1年生の湯澤^{ゆざわ} 滯^{れい}さんは中学校3年生の時に応募し、見事入選を果たしました。彼女の応募までの経緯や、これからの目標などを語っていただきました。

長野県上伊那農業高校1年生 湯澤^{ゆざわ} 滯^{れい}さん (インタビュー: 訓練所職員 斉川)

中学3年の夏休みの課題として出された中で、湯澤さん(写真)の興味を引いたのが「エッセイ」という文字。「それまで感想文は書いたことはあったが、エッセイを書くことはなかった。というより『エッセイ』ってどんな文章?と思ったのが応募した始まりでした」。

湯澤さんの書いた「私ができること」は、幼少時代～現在までの外国人の友達とのエピソードや彼らとの付き合いをしていく間での心の葛藤や気持ちが素直に表現されています。けんかしたり、一緒にドッチボールをして遊んだりしているうちに滯さんは「国籍なんてくだらない」と思うようになりました。「今では幼少時代に持っていた、外国人に対して怖いという気持ちがなくなりました」と笑顔で語ります。

エッセイを書いてみて、自分の思いを活字として表現できる喜びがわかったと言い、「自分に自信がついた。またエッセイコンテストへ応募したい!」と意気込みを膨らませています。



高校生となった今、友達とおしゃべりをしたりすることが一番楽しいといえます。何かを作りだすことが好きで、将来食品関係の仕事につきたいという目標を持ち日々の課題に取り組んでいます。

「今の目標は、学校生活を楽しく一つでよいかから何かを続けていくこと」。

湯澤さんのエッセイ「私ができること」の最後は、「まずは何をしようか。そうだ!まずは、『ありがとう』を言おう!」で締めくくっています。世界中の人が「ありがとう」の気持ちを大切にできたら素晴らしいですね。

平成20年度教師海外研修 プログラム(フィリピン) 研修

小学校長として教師海外プログラムに参加された山岡^{やまおか} 清孝^{きよたか}さん。フィリピンでの体験と、今後について語っていただきました。

伊那市新山小学校 教諭 山岡^{やまおか} 清孝^{きよたか}さん

平成20年8月4日から11日まで、「JICA教師海外研修」に参加させていただきました。

青年海外協力隊員の活動やJICA及びその関連団体の事業見学、小学校・高校で冷や汗をかきながらの英語での模擬授業、日本への出稼ぎ経験女性との懇談等々、多くの研修のなかで一番強烈だったのは「ICAN*パヤタス事業地訪問」でした。あの「ごみ山」のふもとまで歩いたことや、家庭訪問で実際に部屋に入り住んでいる方の話を聞いたことで、「これだけで教師海外研修プログラムに参加した甲斐があった」としみじみ思いました。また、パヤタスの子どもたちとの屋外交流・縄跳びで、子どもたちが高校生ぐらいの障害を持つ子をさりげなく誘っている様子には感動しました。

どの国ももつ明暗・光影、懸命に生きる姿、明るい笑顔、文化の融合、家族の絆、信仰の力等々印象深いことは多いのですが、「子どもたちの将来の夢」は、医師、看護師、教師、警官などで人の役に立ちたいという明確な理由付けがあることや、教科書フィリピン史における大戦中(たった2年)の日本の記述が、スペイン統治下やアメリカ統治下の時代と同じページ数を割いていること、近代史では日本を「アジアを代表する近代国家」として扱っていることも興味深いことです。

これまで、国内研修で「文化を知る→課題を知る」「交流→協働・共生」「課題解決→ビジョン達成」といったことを学んできましたが、具体的現地活動からその意味の認識度がかなり深まりました。また、パヤタス等の訪問や現地に派遣されている方々の話から、貧富の差などのフィリピンが抱える課題と今後の方向性の一端を理解することができました。

今後、学校以外でも機会あるごとに、JICAやICANなどの活動を、各組織等に知らせていきたいと思えます。



▲屋外交流・縄とび

* NPO法人 アジア日本相互交流センターの略称 フィリピンへの支援を中心にさまざまな活動をしている。

お国自慢レシピ

訓練所のベンガル語講師として日々候補者に言語や文化を教えるスルタナ先生。彼女の作るカレーは訓練所の誰もが「ほっぺたが落ちるほどおいしい!」と太鼓判を押しています。今回は、そのチキンカレーの作り方を教えていただきました。

バングラデシュ料理

Chicken Curry (チキンカレー)

*バングラデシュは東南アジアにあるとても小さな国です。バングラデシュでは毎日香辛料をたくさん使ったカレーを食べますが、日本の辛さと違ってあっさりしていてとても美味しいです。一口にカレーと言っても全く同じ味ではなく、入れる具材肉の種類によってスパイスの種類や量が違うので、味もそれぞれ異なります。美味しいベンガルカレーを、ぜひ試してみてください!



—作り方—

1. 熱した鍋にサラダオイルを入れ、オイルが熱くなったところでせん切りにした玉ねぎを入れてキツネ色になるまでよく炒めます(強火)。
2. 玉ねぎが色づいたら塩(最初は小さじ一杯)とスパイスのすべてを入れ、油と材料が馴染んでくるまでさらに中火で炒めた後、鶏肉を入れ強火で炒めます。
3. 鶏肉を入れたら時々軽くかき回し、様子を見ながら肉から出た水分が無くなるまで炒めます。水分が無くなったら肉の上までお湯を浸して、さらに15~20分程弱火で煮込みます。

最後に塩味の調整をして出来上り!

*注意:鶏肉を炒める時に鶏肉からかなり水分が出ます。炒める時に肉が崩れないように気を付けて下さい。

チキンカレー 材料 (6~7人分)

- 鶏肉(ブツ切り・骨付き) 1kg
- 玉ねぎ(せん切り) 大1個
- ニンニク(すりおろし) 大さじ 1.5
- しょうが(すりおろし) 大さじ 1.5
- ターメリックパウダー 小さじ 1.5
- コリアンダーパウダー 小さじ 1.5
- クミンパウダー 小さじ 1
- シナモンスティック 3~4本
- カルダモン(ホール) 4~5個
- ローレル(ホール) 3~4枚
- クローブ(ホール) 6~7本
- チリパウダー 小さじ0.5
- トマト(スライス) お好みで
- サラダ油 90cc
- 塩 適量

レシピの主は誰あら?

ムンシ・ロケア・スルタナ さん
(駒ヶ根訓練所 ベンガル語講師)

毎年駒ヶ根市で行われる「みなこいワールドフェスタ」ではこのバングラデシュのチキンカレーが大人気。辛すぎず、子どもからお年寄りまでおいしく食べられるため、今年も「ワールドレストラン」の前には行列ができ、150食のカレーは瞬間に売れていきました。スルタナ先生は日本に住んで32年。夫のアザド先生からベンガル語の講師を引き継いで2年半になります。バングラデシュ派遣の協力隊員は先生のベンガルカレーで元気付けられ訓練所を巣立っていきます。



「訓練所の一日」 No.17 ~スタッフ講座~

65日間の訓練期間中、様々な講座・行事があります。その中で、我々訓練所スタッフも任地で培った知見や経験を候補者に伝えたく、「スタッフ講座」を開講しています。普段接する中では話にくい事や、任国に対する熱すぎる?思い、現地で行ってきたことや、任国で役に立ったこと、失敗談などを座談会や講義、時には体を動かしながら伝えていきます。また、事例研究や国際理解教育のワークショップなども行い、これからボランティアに行く候補者の方の活動の一助となるよう準備、実施しています。候補者の中には我々よりも経験豊富な方もいらっしゃいますが、熱い思いは負けていません。何よりも候補者皆さんと過ごす時間を楽しみに開催しています。



▲スタッフ講座に熱中する候補者とスタッフ

ボランティア 奮闘レポート

report_42

マラウイ

食用作物・稲作（飯綱町）

青年海外協力隊

すがや そろ
菅谷 惣さん

マラウイ共和国

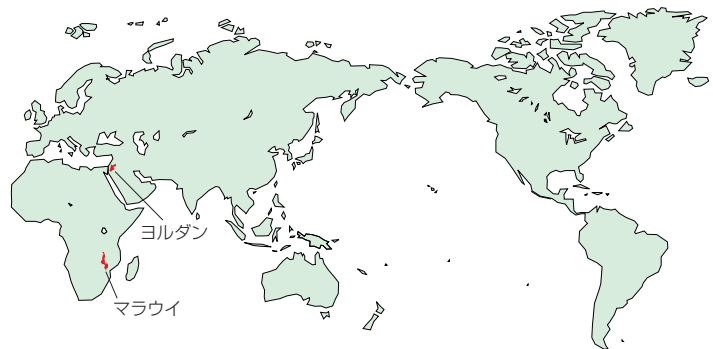
面積：11万8千km²（北海道と九州をあわせた面積）
 人口：1,392万人（2006年、世銀）、
 人口増加率：2.1%（2007年：世銀）
 首都：リロングウェ
 住民：バンツ系（主要部族はチェワ族、トゥンブーカ族、
 ンゴニ族、ヤオ族）
 言語：チェワ語、英語（以上公用語）、各部族語
 宗教：キリスト教が半数、その他イスラム教、伝統宗教
 （外務省HP：各国・地域情勢より）

マラウイに来て1年が経った。先日、トラックの荷台に乗り、村を移動していた。車にはトウモロコシの袋や生活用品等が大量に積み、その上に10人以上が乗り移動していた。マラウイの人達と何気ない会話をしていると、突然後ろで“ドスン”という音がした。振り返るとトウモロコシが2袋落ち、道に散乱してしまっていた。持ち主の若者とおばさんは、「アー」と叫びとても悲しそうな顔をしていた。何ヶ月もかけて育て、やっと収穫して町でお金に変えようと運んでいた事だろう。すぐにドライバーが気づき車が止まり、乗っていた何人かで散乱してしまっていたトウモロコシを一粒一粒集め始めた。必死で拾う農民。私もこの1年間、農民の大変さを見てきたつもりだ。そこで、私もその状況を見ごせず、車を降り集め始めた。文句も言わず、時間など気にせず、笑いながら手伝うおじさんや子供達。マラウイの人々の温かさを感じる出来事だった。

マラウイの農民はやせた土地や不安定な天候、種や肥料が手に入らない環境にある。そんな中で育てられた作物の一つ一つが日本とは比べものにならない位、人々の生活に影響してしまう。そんなマラウイの農民達の生活を良くしていけたらと、日々農民と会話し、汗を流し、土まみれと日焼けで真っ黒になりながら生活している。2年間という限られた時間で出来る事は限られているかもしれないが、この国の人々の事をもっと知っていく事が自分に出来る一番の活動だと信じている。



▲配属先近くの畑で種をまく菅谷さん



report_43

ヨルダン

環境教育（松本市）

青年海外協力隊

かさい ちかこ
笠井 千賀子さん

ヨルダン・ハシェミット王国

面積：8万9千km²（日本の約4分の1）
 人口：560万人（2006年）
 首都：アンマン
 言語：アラビア語（英語も通用）
 宗教：イスラム教 93%、キリスト教等 7%
 （外務省HP：各国・地域情勢より）

私は首都のアンマンから北に約20kmの所にあるアイン・アルバーシャという町の教育省地方支局で環境教育活動を担当しています。ヨルダンでは、環境教育はクラブ活動として行われており、アイン・アルバーシャ内には小中高合わせて20校に環境クラブが設置され、340人程のクラブ員が環境問題、自然保護、動物愛護などについて学んでいます。私はこれらのクラブを支局の同僚と一緒に巡回し、クラブ活動がより活発になるように支援しています。

11ヶ月余り活動をして感じたことは、クラブ活動は教室型の授業形式が多く、生徒の好奇心を刺激するような体験型学習になっていないということでした。環境クラブの生徒には、教室で理論を学ぶだけでなく、外へ出て自分の目で見て確かめ感じるといった経験もしてもらいたいと思い、社会見学を活動に織り交ぜることにしました。

「社会見学なんて思いつかなかった。チカコが提案する活動には新しいアイデアが多くて、自分たちの視野も広がった、ありがとう」。これは以前、見学の下見に出かけたときに同僚にももらった言葉で、ここに来て良かったと心から思えた瞬間でした。これからも、いろいろな活動を提案しながら、「それ面白そう、やってみようよ」とヨルダンの人が思うことに一緒に取り組んでいきたいです。



▲同僚のスタッフと一緒に

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計6名が1月上旬に、それぞれの任国へ出発しました。

(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



くぼた あづさ さん
窪田 あづさ さん
(ネパール/理数科教師/松本市)

世界の屋根ヒマラヤ山脈のあるネパールの高等中等学校に理科教師として派遣されることになりました。教育は人の世界を豊かにする力があると信じています。ネパールの人と共に学べる機会をいただけたことに感謝し、笑顔でいっぱい2年間にします!!



すざわ ともひさ さん
須澤 知史 さん
(チュニジア/青少年活動/松本市)

サッカーに明け暮れていた日々。世界を相手に何ができるかを考えたときに協力隊に出会いました。任地では障害者施設の活性化に自分のスポーツ経験を活かしたいです。支えていただいている皆様に感謝致します。チュニジアの人々の心にシュートを決めてきます!



こいずみ あや さん
小泉 彩 さん
(ボリビア/保健師/茅野市)

私は保健師としてワルネス市の保健センターで活動します。任地のスタッフと協働しながら、スタッフや住民組織の力を引き出す支援、現地に残る支援をしたいと思っています。登山が好きなので、ボリビアでアンデス山脈を眺めながら生活するのが楽しみです。



まるやま さとる さん
丸山 悟 さん
(ニジェール/体育/安曇野市)

西アフリカのサハラ砂漠の下、ニジェールに体育隊員として派遣されます。現地の中学生に体育の授業、及び地域の方へのスポーツの普及活動を行ないます。現地の方と、ニジェールに合った体育・スポーツの形が作れるよう笑顔で頑張りたいと思います!

【シニア海外ボランティア】



むらた よしみ さん
村田 愛美 さん
(イエメン/体育/伊那市)

中学生の時から夢だったこの協力隊で、イエメンに体育指導で派遣されます。体を動かすことの大切さ・楽しさを広め、スポーツを通して多くの笑顔をイエメンに咲かせたいです。まずは自分が楽しむこと!そして現地に根付く活動をしてきたいです。



たけうち しげる さん
竹内 茂 さん
(ラオス/繊維マーケティング/上田市)

私は長年勤務した会社を早期退職しました。退職後の人生を更に一層輝きのあるものになりたいと思い、また知人から勧めもあり、シニア海外ボランティアを志しました。これまで自分が培ってきた経験や知識を、ラオスの人々の社会や文化に溶け込みながら、傳承出来るよう頑張ります。

次回の訓練予定

平成20年度第4次隊 派遣前訓練

平成21年1月7日(水) ~ 3月12日(木)

訓練所こぼれ話 No.9

こうさか たもつ さん
高坂 保 さん (駒ヶ根協力隊を育てる会会長)

私たちに大きな感動を与えた長野冬季オリンピックが1998年2月開催された。この大会の目標の1つに「21世紀に生きる青少年に大きな夢と感動を与え、平和を願う心を育てる」ということがあり、これに基づいて1995年から長野市周辺の小中学校が「1校1国」交流運動に取り組んだ。

私は当時、駒ヶ根市の教育長として、市内の小中学校もこの運動に参加したいと考えたが、会場から遠く、運動への参加は出来なかった。しかし、駒ヶ根には全国に誇る青年海外協力隊訓練所がある。これを活用して「1校1国」交流をしたらどうかと考え、当時の阿部訓練所長にこの想いを話したところ快く賛同して下さった。

子供たちが発展途上国の国づくりに貢献しようとする青年の考え方や生き方に触れ、協力隊を理解するとともに、広く世界に目を向け国際理解の一步を踏み出してほしいとの想いで1998年から市内小中学校と協力隊候補者との交流を始めた。これが、現在の「学校交流」の始まりである。

訓練所で繰り広げられる毎日の中には、写真や記録には残らないけれど忘れ難い、心動かされる一言、面白い出来事、意外なエピソードなどがたくさんあります。そんな訓練所のこぼれ話をご紹介します。



▲学校交流に参加した候補者と(前列左から3番目)

JANUARY

1月

- 7日(水)**
平成20年度第4次隊派遣前訓練開始(3/12まで)(駒ヶ根訓練所)
- 9日(金) 13:00-14:50**
公開講座「ボランティア事業の理念」(講師:伊藤隆文事務局長/青年海外協力隊事務局)
- 15日(木) 13:00-13:50**
公開講座「JICA事業概要」(講師:今井史夫課長/青年海外協力隊事務局)
- 17日(土) 15:10-17:00**
公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師:廣野良吉氏/成蹊大学名誉教授)
- 31日(土) 13:00-14:50**
公開講座「異文化の理解と適応」(講師:木村秀雄氏/東京大学大学院総合文化研究科教授)
- 31日(土) 15:10-17:00**
コンサート「地球のステージ」(講師:桑山紀彦氏/地球のステージ事務局理事)
- 31日(土)**
中学・高校生体験プログラム(駒ヶ根訓練所)
- 31日(土)**
JICAキャリアセミナー(信州大学松本キャンパス)

FEBRUARY

2月

- 長野県教員等ネットワークによる教員セミナー(予定)
- 8日(日)**
教師海外研修プログラム 実践報告フォーラム(名古屋市)
- 13日(金) 15:10-17:00**
公開講座「ニッポンの知恵から学ぶ~日本の開発経験~」(講師:水野正己氏/日本大学大学院教授)
- 19日(木) 15:10-17:00**
公開講座「技術と開発のかたち」(講師:中村尚司氏/龍谷大学経済学部教授)
- 21日(土)**
JICAボランティア帰国報告会(予定)(駒ヶ根訓練所)

MARCH

3月

- 12日(木)**
平成20年度第4次隊派遣前訓練修了式(駒ヶ根訓練所)
- ◆ 公開講座の聴講を希望される方は、2日前までに駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・公開講座担当まで、ご連絡ください。なお、講師の都合で日程が変更となる場合もありますことを予めご了承ください。

編集後記

新年、明けましておめでとうございます。
昨年10月「みなこいワールドフェスタ」が地域の皆様のご協力により、大盛況のもとに終了しました。最終日は生憎の雨天ではありましたが、訓練中の候補者も生き生きと各ブースで担当の仕事を行い、駒ヶ根市の皆さんや会場に足を運んでくださった方々と交流が出来、よい気分転換にもなっていたようです。今回の特集「開発教育支援」はいかがでしたでしょうか。昨年、中学校で出前講座を行ってきました。その時も生徒たちがアクティビティーや体験談を聞きながらいろいろと感じたり、気づいたり、考えたりする姿を見ることが出来ました。少しでも学習のお手伝いが出来たのかなと、うれしく感じました。(ス)

お知らせ

地球のステージ

このステージの魅力は、美しい音楽と映像を通して、まるで登場する人物たちと本当に出会ったような感動を与えてくれるところです。恵まれない環境にいる子どもたちを見て「かわいそう」と思うのではなく、地球上に強く生きていく人たちがいることに勇気が湧いてきます。
今回は土曜日の午後からの公演です。学生の皆さんも、小さなお子様のいらっしゃるご家族の方も、ぜひご来場ください。(要予約、入場無料)
1月31日(土)15:10~17:00
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 森のステージ

第3回 信州国際塾

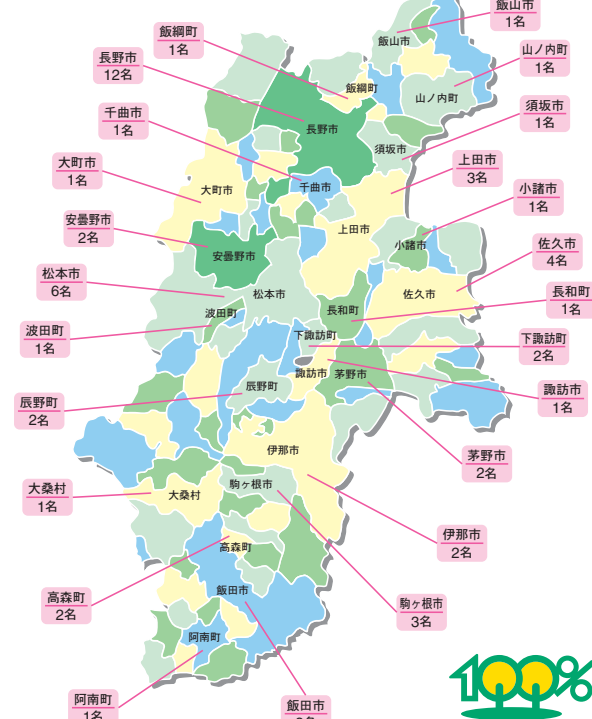
今回の信州国際塾は中学高校生向けの訓練所体験入隊となっており、1月31日(土)に開催を予定しています。詳しくは、長野県国際交流推進協会内JICAデスク:026-235-7186(担当:小林)までお問い合わせください。

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア!

JICAボランティア派遣実績 平成20年11月30日現在

①青年海外協力隊員数	③日系社会青年ボランティア数
派遣中 52名(内女性35名)	派遣中 2名(内女性1名)
帰国 620名(内女性272名)	帰国 14名(内女性8名)
累計 672名(内女性307名)	累計 16名(内女性9名)
②シニア海外ボランティア数	④日系社会シニアボランティア数
派遣中 4名(内女性1名)	派遣中 0名(内女性0名)
帰国 30名(内女性5名)	帰国 2名(内女性0名)
累計 34名(内女性6名)	累計 2名(内女性0名)

派遣中JICAボランティア(平成20年11月30日現在)



100%
古紙100%再生紙

信州発 国際協力

独立行政法人 国際協力機構 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-4117
長野県駒ヶ根市赤穂15
TEL.0265-82-6151(代)/FAX.0265-82-5336
E-mail/jicakjv@jica.go.jp
http://www.jica.go.jp/komagane/index.html

